

# ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部

■発行日 　2004年11月　22日

■連絡先 　藤川博樹

〒115-0045

北区赤羽 1-48-3 ドミール藤 203

tel03-5249-5797 fax03-3901-6090

■編集 　蒲原直樹 佐藤ユミ子

No.277

## 12月行事日程

### ■ ニュース編集兼忘年会

原稿はテキストにして下記へ

ワード文書も可

kamo@sun.email.ne.jp

### ■ 12月18日(土) 4:30

四ツ谷地域センター 11F

地下鉄丸の内線 新宿御苑下車

四ツ谷方面へ徒歩5分



礼文島の宿の窓から見える利尻富士('04.8月)

◆十月二三日、友人たちとお茶を飲んでいた柏駅前ジョンサンのビルが大揺れになりました。店にいた客は、みんなあわてて外に出ていました。店を出て帰宅する車の中で「中越地方に大地震」のニュースを聞きました。驚きです。ユミ子の実家が長岡なのです。帰宅してユミ子に「電話した？」と聞いても「通じない」という返事です。ニュースは刻々と惨状を伝えていきます。「どうなるんだろう？」と、かなり深刻に考えてしまいました。

◆翌二四日になって、高崎の姪から「無事らしい」という報告があり、屋には義兄から直接電話があったりして、最悪の事態は避けられたようだと分かりました。しかし、ライフラインは回復せず、家には亀裂が走り、余震が怖いので車の中で寝ているという話でした。義母はもう九〇です。寿命に関わる事態です。ユミ子はすぐにでも長岡に行きたいようでしたが、高崎から向こうの交通網が切れている以上、長野回りか福島回りで行くしかありません。それとも新潟まで飛行機で飛ばか……。どちらにしても、向こうの混乱が収まらないことには何をしたいのか分からないし、下手に動く迷惑になりかねないので、しばらく様子を見ることになりました。

◆その後我が家では、地震に備えて非常連絡に使う携帯電話を買い、後部座席で足を伸ばして眠れるワゴン車を購入しました。また築三〇年の家屋の土台を固定する金具を取り付け、中二階の床を強化し、鉄骨を入れました。震度七の地震が来ても大丈夫とは思えませんが、少しは安心できる環境になりました。長岡にはまだ帰っていません。義母が「今、車なんかで来て、災難に巻き込まれたらどうするだ」と反対するからです。これから雪も降るし、どうしたものでしょう？(N)

## ふたりの手

③

蒲原ユミ子

校庭をぐるりとかこんだ桜の葉が初夏の日差しを受けぐんぐんいきおいづいていく。運動会はもうあさつてに近づいた。

ただ今、3年生が校庭いっぱい広がってダンス『ジギスカン』の仕上げ中である。頭に黄色のバンドナ、手に黄色の軍手をはめ、もう運動会の本番のようにじょうずにおどっている。先生方は朝礼台の上やおうえん席あたりで必死に全体をチェックしている。

前列の一番はしがレナ。そのとなりがモモカ。

レナは曲に合わせ、しなやかな手足で力いっぱいおどっている。明るい青空の中、レナのこい茶色の肌があっぴれというほど美しく映えている。モモカはかっこいいというのではないが、おどるのが楽しくてたまらないというふう

リズムに乗ってびよんびよんはねている。

ピンポン パンポン

じゅぎょう終わりのチャイムが鳴ったけれど、まだ曲は終わっていない。先生たちのきんちようはつづく。もちろん、3年生もいっしょうけんめいおどっている。しようこう口から4年生の女子が遊びにかけ出てきたが、まだ3年生がおどっているの、立ち止まって見始めた。ひとりがレナを指さした。

「あの子、うまいね」

「うん。こげパンだからだよ」

せの大きい子がこずるい顔で言った。

「こげパンて、おいしくないよね」

『ジギスカン』が校庭いっばいに流れていたけど、モモカにはすっかり聞こえてしまった。モモ

カはとなりのレナをそっと見た。

レナはおどりをやめ、4年生をにらみつけている。かみの長い4年生がわざとらしく体をすくめた。

「わおー、こげパンてこわい」

レナはつかつかと4年生に向かって行った。4年生は「なによ!」という顔でレナを見る。レナは自分より大きい3人の4年生にきっぱりと言った。

「やめてください、わる口は」

4年生はとぼけた。

「あら、おどりがうまいと言ったんだけど」

モモカはバクハツしてしまった。

モモカは4年生の前にすっとなで行き、「このヤロー!」とさげび砂をひろって投げつけた。4年生はびっくりしておこった。

「何するのよ!」

でも、モモカは右手で砂をつか

んで投げつけ、まっ赤な顔でどなった。

「その口、つぶれちゃえ!」

じつは、モモカもそう言われたことがあるのだが。4年生はぶつぶつ言いながらにげてつた。まん丸先生がゆっさゆっさと走って来た。モモカはもう4年生はいなくなっちゃったのに、「ばーか!」と思いい切りべろを出している。まん丸先生はふしんそうに聞いた。

「いったいどうしたの、モモカさん」

モモカはまん丸先生を見てわれに返ったが、急にしゅんとなりだまってうつむいた。レナもきつく口を結んだままだ。

放課後。モモカが一人で算数ののこり勉強をさせられている。くり下がりの引き算ができないせい

もあるけれど、まん丸先生はきよ  
うの「砂投げじけん」の真相をモ  
モカから聞き出したかったのだ。  
レナに聞いてもこんりんざい話を  
うとしなかったし。

今はまん丸先生はお茶を取りに  
行ったところ。モモカは黒板に書  
かれた引き算をノートにいやいや  
写し、こたえをらんぼうに書いた。

4×6=20

とつぜん、後ろから声がした。

「ちがう。20は4×5でしょ」

モモカがふりむくと、ランドセ  
ルをせおったレナがのぞいている。  
モモカは気まずそうに笑った。レ  
ナはさつぱりと言った。

「わたしはしゆくだいの日記帳を  
わすれたからもどって来たの」

モモカのえんぴつはなかなか進  
まない。レナはモモカのとなりへ  
こしをおろして言った。

「4×6は20にあと4をたし  
てごらん」

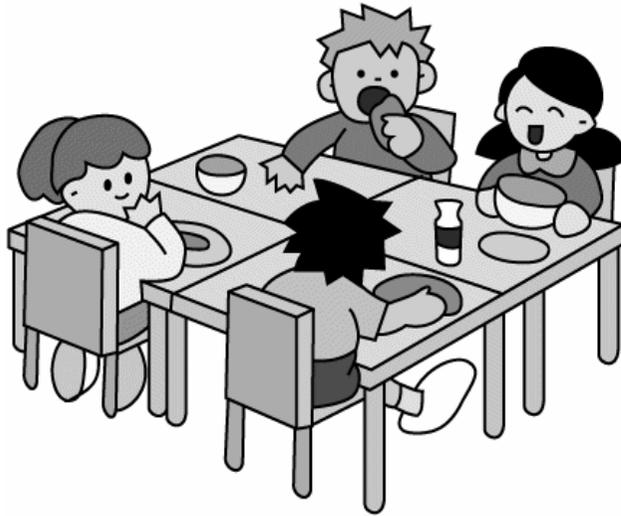
「20・・・」

なかなか答えが出てこないの  
で、レナはモモカのノートのほしっこ  
に20+4とひっさんで書いてや  
った。すると、モモカが言った。

「あんたの手、きれいだね」

レナはあきれたようにモモカを  
見たが、言い返した。

「あんたの左手は短いけど、けっ



ず聞いてしまった。

「でも、モモカちゃんは何んでい  
つも給食をたくさんのごすの？」

モモカはこまった。自分のわが

ままにすぎないことはわか

っているのだが。そして、

こまりながらモモカはうれ

しかった。レナにはじめて

『モモカちゃん』と言われ

たから。

レナは遠くを見てひとり

言のようにつぶやいた。

「バングラディッシュには食

べ物をのごす子はいないよ。

学校だつてこうずいで流さ

れてなくなつてしまったと

ころがあるし」

「こんどからきゆうしよく

をのこさない！」

思わず、モモカは言つて

しまった。さびしそうな目

になったレナを喜ばせたく

て。思いがけないモモカの言葉に

レナはうたがわいそうにモモカを

見た。

「ほんと？」

「う・・・」

モモカはきらいなこんだてが1

0以上ある。レナの目がひよう  
きんに笑った。

「ちよつとずつがんばつたら？」

「うん」

モモカはほつとして力強くうな

ずいた。

ドアの外では、お茶と大きなシ

ュークリーム1こを持ったまん丸

先生がにこにこしながら教室をう

かがっている。

(きようはこれを3人でいただき

ましょう)

おわり

# ジャンクタウン戦記

式十五

蒲原直樹

空挺隊兵士の軍服を着た男はずんずんと部屋の中に入りこみ、ヘルメットから突き出たヘッドセットマイクに向けて「第二目標を確保」と英語で伝え、暗視ゴーグルらしきものを押し上げて反町の前に立った。

「ヒョンニム！」

「ケンジ、迎えに来たぞ」

兵士はヤン・スニールだった。反町は義兄が自らこの魔窟に向向いてくるとは考えもしなかったので、心の底から驚いた。

（大使館付きの武官が、他国内の施設を武力攻撃するなんて……許されることとは思えない。なんでそんな乱暴なことをやっただらうか）

いぶかしげに眺める反町に、スニールはにやりとして言った。

「おどろいたようだ。ケンジ、おまえが捕虜になっている間に情勢は変わったんだ。各国の情報部はもうなりふりかまわずここに押し寄せている。我々にはおまえを救出するという名目があったので、この作戦に踏みきったんだ。おかげさまでな」

スニールは「オカゲサマ」という言葉だけ日本語を使った。

「だから私は『第二目標』ですか。第一はなんですか？」

「こっちへ来い」

スニールはあとで反町を招いた。反町が廊下へ出ると、いつもは薄暗い廊下にまぶしい光が差しこんでいた。まだ硝煙と粉塵の舞い立つ廊下の壁に、巨大な穴が開いていたのだ。そしてその裂け目から奇妙な光景が覗いていた。反町が閉じ込められていた五階の廊下は地上二〇メートルほどで、魔窟の中央よりは地下にある。そこから上部に「枝」のようなパイプがあり、一週間ほど前に反町が見た花卉ではなく、果実が吊り下がっていた。表面に複雑な模様がある、あの隕石にそっくりの果実だった。

「おお……魔窟は実をつけたのか！」

「わかるだろう、あれを見れば」

スニールは意味ありげに頷いて見せた。

「各国の科学者や防衛施設は、もう好奇心を押しささげなくなつた。日本政府や県や町に

『わが国にもあの果実を一つよこせ』という

要求が殺到したそうだ。韓国政府も当然要求したが、断られた。容認されたのは米・露の二国だけ。だから参謀本部はオレに『なんとしてもあれを一個確保せよ』と命令してきたんだ。オレにはおまえという切り札があった。そこでお飾りに横須賀の米軍指揮官を握

えて、オレ自身が一個師団を率いてこのタワーを急襲したつてわけだ。空挺師団はもう輸

送ヘリで果実を数個確保したよ。抵抗はあったが、改造銃程度の武装だから精強なる韓国軍にとつては赤子の手をひねるようなものだった」

「……」

「オイ、聞いているのか」

反町は黙って青空に浮かぶ赤銅色の果実を見上げていた。

それから反町は東京に戻った。韓国大使館のヘリコプターで南麻布へ運ばれ、近くの麻布十番病院に数日間入院した。その間、ひっそりなしに韓国情報部の事情聴取を受け続け

た。

それが終わったら今度は警視庁から呼び出しを受けた。ここでも執拗な事情聴取を受け、逮捕監禁の被害届を出せ、と言われた。しかし彼は留保した。

最後に自宅に戻る前に寄った「週刊トビックス」編集部でたつぷり体験談を話させられた。それらは筆者たちの手によってすぐにルポ記事に化け、誌面を飾った。そしてやっと反町は自由の身になった。

反町は周辺の片付けが終わったらすぐに葛山町へ戻るつもりだった。しかし監禁生活でなまった体はなかなか回復しなかった。もう一度あのゴミの山に埋もれた町に戻るには相当の気力と体力が必要だったが、そのどちらも沸いてこなかった。なぜか携帯電話も沈黙していて、カーリーからもプファエルからも連絡はなかった。ウェブサイトを覗いてみると、もう魔窟同や救女教のサイトは消えていた。

表面的には事件はすべて解決していた。魔

窟は解体され、被監禁者は解放された。改造銃で武装した職員グループは全員逮捕され、町長始め町役場の主だった役員は解任された。戦闘による死者はなく、催涙弾で打撲傷を負った者が数人いたくらいだった。兵隊達は賢明にも実弾は使わなかったらしい。捜査と捜索は日米韓の合同で行われた、と発表され、韓国海軍の参加は秘匿された。

魔窟の地下にあった隕石と「果実」はいくつかの研究所で分析され、鉄を中心とした金属と岩石とタンパク質の複雑な混合物だということだけは分かった。詳細はまだ研究中で、当分結論が出る見込みはなさそうだった。

その中でマサチューセッツ工科大学は飛びぬけて進んだ報告を出していた。

「隕石は地球外生命体とまでは言えない」と彼らはホームページ上に発表していた。「それは諸成分から見てもせいぜい月と同じ地球の衛星のようで、大気圏外の存在ではあるが地球外ではない。生命体である証拠もまだ発見されてはいない。複雑で活発な化学反応をするものではあるが、それ自身が生きているとはまだ言えない」という意味の文章が流されていた。

## ふみの会ニュース (5)

それは確かに、ロボットを「生きている」とは言えないのと同じだろう、反町はそう考えた。しかし、ロボットを作ったのは生命体

だろうし、それが地球外のものでないとすれば、その生命体とは人間だろう。何者かがあの「隕石」を作ったのだ。

(では誰がなんなものを作ったんだ……?)

考えはそこで停まってしまふ。終わってみれば他愛もないイタズラのような「魔窟」だったが、それを出現させたメカニズムはどうしてイタズラでは出来ない大規模なものだ。

化学的な知識だけでなく、心理学や精神病理学まで応用した、複雑なメカニズムが働いていたのだから。

(そのカギを握っているのはラーフラだ。葛山町に戻るよりも、渋谷宮脇坂のカルトハウスに出かけたほうが謎は解けるかもしれないな……)

反町はそこまで思いつくと、ようやく取材に出かける気力が湧いてきた。

季節は春に変わっていた。魔窟崩壊から正確に一ヶ月、ところどころに早咲きの桜を見ながら反町は山手線に乗って移動していた。

『週刊フィング』の三人はもう編集部にはいなかった。菊石農場は経営者が変わっていた。県警の石田課長すら退職して行方不明だった……)

反町は奇妙な、居心地の悪い孤立感にさいなまれていた。

(あの町で会った人間で、キーパーソンと思

われる男女はことごとく消えてしまった。悪い夢でも見ていたようだ。……これから行くカルトハウスにラーフラなる占い師がいなければ、もうどこにも手がかりになる人物はいないことになる……)

電車が渋谷駅に滑り込んだ。東急側の出口は八チ公前ほど込んではいないが、それでも相当の混雑だった。反町は人間が沸騰する歩道を縫うように進み、明治通りを越えていくつ目の路地を入った。雑居ビルが並ぶ路地に、一つだけ派手なピンク色に塗られた建物があり、中高生らしい少女たちがワイワイいながら出入りしていた。近づくくと看板があり、『運命の館/フォーチュンテラー・ハウス』と書いてあった。そこが目的のカルトハウス

なのはどうやら間違いないさそうだった。反町は狭い入り口に入り、少女たちをかきわけて受け付けに進んだ。そしてそこに座っている地味な服の女性に、

「ラーフラさん」と言った。受付の女性は無表情に、「二五人待ちになります」と応えた。

反町はラーフラは存在したんだ、という安堵感とともに、そんなに人気があるのかと驚いた。

「それは何時間待ちくらいになりますか?」「一人二〇分として五時間ですが、延長される方もいますので六時間ほどになるかと思

ます。途中で夕食と休憩をはさみますので、もっと延びる可能性がありますね」

「そんなに待ってられないなあ」反町は顔をしかめた。

「じゃあ、この名刺をラーフラさんに渡してもらえませんか?……こんな男が受付に来ていろ」と

反町は『週刊トピックス』編集員の肩書きの入った名刺を手渡した。受付の女性は名刺を見るとあわてて走り出し、階段を一階に駆け上がった。そしてしばらくすると一人の女性を伴って降りてきた。ラーフラとおぼしいその女性は、ゆったりとしたギリシャ風のワンピースにショールをかけていた。

「反町さんですね?」

近づいた彼女の顔を見つめた反町は、二十歳ぐらいの若い女性を想像していたのに、あまりの違いに驚いた。たしかにカーリーによく似た目許の美しい女性ではあったが、姉と違いには年上すぎた。少なくとも反町の年代より少し下くらいと推定できる。

「あなたがラーフラさん?……『救済の女神教団』の?」

反町の問いに女性は、

「はい、そうです」と応えた。

(次回完結)

## 街頭ジャズ

中井 豊

鉄道のターミナルには托鉢や募金や客引きやの人達がいる。物乞いの人は少なくなつたように思う。フォーク・ソングが流行つた頃からだろうが、楽器や歌の演奏がターミナルの街頭で見られるようになって久しい。多くはプロの「芸術家」ではなさそうで、行きずりの人々に練習の成果を聴いてもらおうという大道芸人に似た心構えが好ましい。言うまでもなく、芸事というものは熟練を要する。音楽でも聴衆を楽しませるのは容易なことではあるまい。

先夜、所属しているオーケストラの合宿を終え、一杯呑んで帰る途上、南海・難波駅の前でのことだ。その日もさし明かりの下で、楽器を鳴らし、歌をうたう若者のグループが数組あつた。いつもは気にもとめず群衆と共に通り過ぎるのだが、たまたまベース（コントラバス）とギターでジャズを演奏している二人組の男が目にとまった。

一人がベースを抱えて太い指でピツイカートで弾き、もう一人がギターを鳴らしながら一心に歌っている。ジャズについて無知な私にも、正確なリズムと和音で演奏しているように感じられた。

二人とも音楽好きで人柄の良さそうな日本の若者だつた。二人は三〇歳前後で、ややぐたびれた様子があり、それがまた良かった。それで足が止まったのかも知れない。しばらく聴いていると、周りに人垣ができた。彼らの演奏が通りすがりの人々の耳をとらえたのだ。

聴衆の中に、立派な体格で紺の背広を着こなし、眼鏡をかけて知的な風貌をした黒人が一人いるのに気付いた。リズムを取りながら静かに耳を傾けていて、ジャズが血肉となつていような独特の雰囲気があつた。それで、近寄つて行つて、

“Wont you join them?” (参加しない?)  
と言つてみた。

“Oh, yes! I'm a jazz singer. But I don't speak Japanese well. Will you tell them?”

(いいよ。私はジャズ・シンガーだ。でも日本語が不自由だから、彼らに言つてくれるかい?)  
という待つていたような返事だつた。ギターリストに、

「歌つてもいいか尋ねているよ。」  
と言つと、

「いいですよ、どうぞ。」

そう気さくに応じてくれた。

ジャズ・シンガーは二人の横へ来て一寸友好の身振りをし、アタシユ・ケースを地面に置いた。ギターリストとベースマンは流暢な英語で話しかける。私の通訳は余計だつた。三人で何やら簡単に打ち合わせ、直ぐに演奏が始まった。聴衆へ向かつて姿勢を正し、楽器のリズムに合わせて左手の指でリズムをとつた後、ジャズ・シンガーは洪い声で歌い始めた。

曲はジャンソンの『枯葉』だつた。体をスイングさせ、時折こちらに眼を合わせ、心をこめて歌っているのが伝わつて来る。間近にいと本場のジャズは実に魅力的である。思わず周囲も手拍子を打つ。

『枯葉』が終わると聴衆が足許に置かれた帽子にお金を入れた。もっと聴きたいと思つていると、ジャズ・シンガーと二人の若者の会話から、

“……A train? ……”  
(……A列車? ……)

という単語だけが聞き取れ、次の演奏になつた。

耳を傾けながら、私は立つ女性に、  
「楽しいものですね。」  
と話しかける。彼女は、

「私、ポピュラー・ピアノを教えているんですけど、ああは行きません。」  
と感心している。

歌い終わったジャズ・シンガーは置かれた

帽子にお金を入れ、アメリカ合衆国から来たと言つた。さらに、ハーヴィー・トンプソンと名乗つて背広の胸ポケットから自分のCDを取り出して見せた。そして、自分のホームページのアドレスを告げてビジネスマンのようについて行つた。

ギターリストに、  
「どうも有難う。今夜は楽しかった。よかつたら、一度電話して下さい。」  
と言ひ残して私もその場を離れた。愉快な気分には満たされていた。

数日後、彼から電話があつた。大阪市内で一人暮らしをしながら、コンピュータやギターを教えていて、仕事の傍ら友人と街頭でも演奏しているとのことだつた。或るプログラムでハーヴィー・トンプソンのことを後になつて知つたとも言つていた。私達の演奏会について話すと、友人を誘つて聴きに行くと言つてくれた。

ターミナル駅の周辺では今もライブ演奏が行われているに違いない。主としてギターを弾きながらフォーク・ソングのようなものを歌っているようで、耳慣れたクラシック音楽しか解さない私の関心をひくことは殆どない。それでも、音楽への共感はある。楽器を携えている人には興味湧く。ふと話しかけてみたのが思わぬ出会いとなつた。

# 遺言

内田幸彦

背中し若の生えるくらい生きてきた。遺書でも書こうかな、と思うことがある。

この世をば線香の煙と共にハイ左様奈良

というような軽妙な辞世の句が詠めればいいのだが、俳句・短歌・詩など短いものは丸で駄目。喉元で息が詰まったように一向に出てこない。

考えてみれば、遺言状を残すほど財産がある訳でなし、家族に言い残したい一家言もない。何となく書いてみたくなる年頃なのかも知れない。

振り返ってみると、三度死にかけて、一度殺されていた。

最初は小学生の頃、泳いでいる最中に六尺禪が解け、足に絡み付いて動けなくなり、沈みかけた時、運よく仕事をしていた漁師に助けられた。

(7) 二度目はバイクで六十七日も入院した。脇道から急に子供が飛び出して来たので急ブレーキを踏み転倒、失神、入院した。転倒の際左肩で体を支えたのか、鎖骨と足首の骨が折れた。運悪く頭を打っていたら死んでいた所ふみの会ニュースだ。

三度目が腸捻転で、厄年のことだった。三人の医師に見放され「会わせる人があったら呼びなさい」と家内が言われたらしいが、どんな具合か助かった。世に言う「病氣と寿命は別」ということだろう。

一度殺された、というのはおかしい話だが、ある日、同級だったYに街で出会った。Yは目を丸くして、

「やあ、お前まだ生きていたのか？」

いきなり失礼すぎるではないか。

「久しぶりに会ったのに、冗談もいい加減にしろ！」

と語気を強めて言った。

「違う、ほんとだ。去年の同窓会名簿を見てみる。お前は故人になっているんだ。」

驚いて別の級友から同窓会名簿を借りて調べてみると、「病没」になっていた。早速印刷屋を呼び付け、問い糺してみると、大勢の卒業生だから調べもせず、例年並みに右へならえの、金儲け主義の、やつつけ仕事だった。その言いくさが何と、

「一旦あなたは何んだんですから、今度は長生きしますよ。」

物はいよいよだと口あんぐり。死についてそれだけの経験があるのに、な

お無信仰だ。と言うのは、小さい商売を二十余年やった間に、頼る者は自分しかないという哲学が身につけてしまったからだ。

苦渋を他人には話せない。相談する相手もない。何が起ころうと、自分が考え、決断して解決するしかない孤独の日々だった。そんな生き方が自分流の自信をつけてしまった。

「内田教」を開いたのである。もう一つの理由は、死ねば火葬にされ、骸骨しか残らない。脳髓も灰になるから魂も精神も存在しなくなるという結論だ。

M先生が亡くなって十年になる。先生には文章の手ほどきを受けた。M先生は真面目を絵にしたような人で、教育に情熱を傾ける崇高な、現代に見られない教育者だった。その先生が、

「私は道元(曹洞宗の開祖)の『正法眼蔵』九十五巻を三度読んだが、それでも死は怖

い。」

と言われたことがある。先生が三度読んでも悟れなかったと言うのだから、勉強も信仰もしない私が死を悟れないのは当然であろう。

一九七〇年(昭和四五)に腸捻転で生死の境をさまよっていた時、私が見た悪夢を覚えている。

逆巻く大波に吞まれ、潮を飲み、七転八倒の苦しみをしたり、突撃する多数の兵士の軍靴に踏みじられ瀕死の重傷を負ったり、吹きすさぶ木枯らしに飛んでくる木の葉に埋もれたり。兎に角、上から押さえつけられる夢

ばかりだった。たぶん娑婆と鬼籍の境を行き来していたのだらうと思う。

中に一つ、毛色の違った夢があった。中国風の大邸宅の前の池に睡蓮が咲き乱れ、土手に横座りになった美女が笑顔で手招きをする。それがあの世の入口だったのでは、と思わず首をすくめた。邸内に入っていたら死んでいたかも知れない。生と死の別れ道だったに違いないと思っている。

最近、フト思った。あと何年生きる？三年か五年か？限られた命！私は動揺した。これはうっかり無駄に過(せ)ない、と気付いた。それ以来、三十分、一時間を惜しんで生きる積極人生に転じた。

夏なら朝五時には明るくなるから畑に行き、七時半に帰って朝食。労働後の朝食の旨さは格別だ。朝食が済むと、日に一篇は何かものを書く。午後三時頃から買い物。帰れば晩酌のビールが待っている。一日が楽しく張り合いがあつて、私の人生は一変した。

これで毎日時間が足りない。遺言状などそっち退けになってしまった。残り少ない日々を思うまま生きよう。遺書なんてもう止めた。私には元々遺書など残す資格がないのだ。

宇宙のささやき その2

## 無人島に持っていくもの

藤川博樹

無実の罪、あるいは政治的弾圧によって獄中生活を余儀なくされたとき、ただ一冊の本が許されたとしたら何を獄中に持ち込むか。よく戯れにそんな話をすることもあった。

これが本でなく、音楽、CDであるとしたらどうか。島流しか何かにある無人島に長い時間過ごさなければならぬとしたら。ラジカセを持って行って、ただ一枚のCDに何を聞か。まあ、無人島に電気が無いのじゃないかという無粋な質問は今置いておくとして。

まだ音楽を聴き始めて間もない若いころなら、この質問に答えるのは簡

単だった。今では一枚を決定するのがなかなかむずかしい。大学の卒業も決まって家でゴロゴロしているころ、たまたまラジオのFM放送でエアチェックした曲が、ショパンのピアノ協奏曲一番だった。そのころあったデンスケ(フニ)の大きなデッキタイプラジカセの粗末な音で繰り返し聞いたものだった。現代と比べれば粗末かもしれないが、そのときは素晴らしい音だと思っていた。

これから社会に出て飛翔しようという旺盛な意欲、何か高いものへの若々しい憧れというのはあまり無かった。無かったと今は思うがこの曲の内容はまさにそういったものを表現している。若い甘い厭世観みたいなものを、内から溢れ出るエネルギーが自然とうち破つてしまっているような若々しい曲なのである。

若くて未熟でたくさん曲を聴いた経験がないと、最初に聞いて感動した曲を、それしかない、これ以外には無いと思ってしまうものである。その後、いろいろな人のいろいろな演奏を聞くと、これもいい、あれもいい、これはもつと良いなどと思いはじめ

のであるが、感動の鋭さ、深さの点において最初のものに及ばないのはなぜであろうか。

ショパンのコンチェルト一番も、その後いろいろな演奏を聞いたが、その最初の演奏を超えるものには出会わなかった。その演奏というのは、一九六〇年、ポリーニが一八歳でショパンコンクールに優勝したときの演奏である(正確にはその直後の録音)。雛鳥が孵化した時、最初に身近にいる動物を自分の親だと思つてくつ歩いて歩くという現象をインプリンティングというが、最初にポリーニを聞いて印象が刷り込まれてしまい、それ以外の演奏では感動できなくなってしまうのだろうか。

ショパン ピアノ協奏曲第一番  
マウリツィオ・ポリーニ、パウル・クレツキ指揮フィルハーモニア管弦楽団

ポリーニは、その後、ショパンのエチュードを聞いて、水のように澄みきった完璧な音楽に感動したことがあるが、彼の演奏ではショパンのコンチェルト一番以外を聞くことはなくなつてしまった。ショパンはホロヴィッツ

ツで聞くようになり、モーツァルトをバレイボイムで、ベートーヴェンをバックハウス、アラウでと遍歴したが、年齢を重ねるとともに、感性も好む音楽も変わってくる。しかし、今でも、ショパンのこの曲を聴くと、青春の息吹といったものがよみがえってくるのを感じるのである。

